# 陸前高田市から児童を招き、石川県内の児童と楽しく交流

## 石川県で自然や美術を満喫

27 日に陸前高田市を出発した子どもたちは 28 日、石川県の子どもたちと初めて顔を合わせグループをつくってとうもろこしの収穫体験、昼食にはバーベキューを楽しみながら交流し、午後は和菓子づくり体験、金沢 21 世紀美術館見学などを行ない、お互いに打ち解けて笑顔で話すことができるようになりました。

とうもろこしの収穫体験では、コープいしかわ本部の裏にある農園で毎年行なわれる「サタデーとうもろこし狩り」に参加しました。これは生産者の苦労や良いとうもろこしの見分け方の話を生産者から聞くなど「食育」を目的とした行事です。収穫するとうもろこしの選び方や取り方（もぎ方）などを農家の方から聞いた子どもたちは畑に入り，自分で取って、その場で皮をむいて生のままで食べる体験をしました。陸前高田市から来た濱口木（はまぐち　もく）くん（6 年生）は「今までとうもろこしを取ったことがなく、生で食べたこともありませんでした。でも簡単に取れてチョー面白かった。生で食べても甘くて美味しかった」と喜んでいました。

昼食はみんなでバーベキューをしました。温室内（日除けはある）の施設だったので少し暑かったようですが、沢山の食材を炭火で焼いて食べながら交流がすすみました。金沢市内から参加した竹本歩美（たけもと　あゆみ）さんは、「家族で（バーベキュー）をした時よりも友達がいっぱいいたので楽しかった。みんなとはすぐ仲良くなれたので金沢の良いところを陸前高田の友達に教えてあげたい。夏休みの良い思い出になりました。」と話していました。能美市から参加した宮竹祐生くん（５年生）は「バーベキューは暑かったけど、仲良くなった友達と美味しく食べました。とうもろこしを取る時にヒゲが青いとまだ熟していなくて、茶色になっていたら取っても良いことを初めて聞きました」と農家の方の話が特に気に入った様子でした。

お昼はみんなで好きなお肉を焼いてバーベキュー。
住むところは違っても、すぐに仲良くなれた。

昼食後は和菓子づくり体験です。金沢市内の兼六園近くにある石川県観光物産館の体験ホールで老舗和菓子店の職人さんから生菓子の作り方を教わりました。大型テレビに映し出される説明を見聞きしながら組合員ボランティアやホールの職員に手助けしてもらって、用意されていたあんこ（餡子）を使って和菓子づくりに取り組みました。和菓子作りは始めてという陸前高田市から来た関戸爽（せきと　さわ）さん（６年生）は「これまでにやったことがなく、けっこう難しくてあまり上手にできませんでした。でも、一通り作ることができました」といいます。金沢は茶の湯の文化が発展したことで和菓子づくりが有名

なことについては知らなかったそうです。でも「食べてみておいしかった。和菓子屋さんにあるようなあんこがあれば、家でも作りたいと思いました」と言って，自分の作った和菓子を見せてくれました。それぞれが作った３個に職人が作った１個を加えて４個の和菓子を箱に詰めてお土産に持ち帰りました。

和菓子作り体験後、兼六園から歩いてもすぐ近くにある「金沢２１世紀美術館」の見学でした。外の暑さに閉口した子どもたちは涼しい館内で一休みしながら展示物を見学しました。

**ともろこしの収穫が楽しかった**

前出の濱口木くんは「複雑で迷路みたいな美術館は楽しかったです。展示物は（理解が）ちょっと難しかったが、プールの展示（レアンドロのプールという下に人が入れる作品）がいちばん面白かったです。九谷焼のお皿がとても奇麗でした」と言っていましたが「今日いちばん気に入ったのはとうもろこし収穫です」との感想を持ったようです。

陸前高田市から来た菅野美月（かんの　みづき）さんは、「最初のとうもろこし収穫はみんなで楽しくできたし、バーベキューは遊んだり楽しみながら食べれたのでよかったです。和菓子作りも難しかったけれど楽しくできました。美術館には不思議なものがたくさんありすごくおもしろかった」。そして「初めて会った子ども達でしたがみんなと仲良くできました」といって石川県に来たことを喜んでいました。

コープいしかわ本部の裏にある農園で行なわれた
食育イベント「サタデーとうもろこし」に参加。
生とうもろこしをガブリ！

小学２年生の響（ひびき）さんと参加した岡野淳子（おかの　じゅんこ）さんはボランティアをかってでた組合員さんの一人。これまで活動への直接参加はなかなか難しいので募金などの支援をしてきたといいます。そして「震災は次第に忘れられていくので、子どもには津波の被害に遭った大変なところの子どもたちがくるんだよとさりげなく話してあります。ですから子どもなりにわかっているのかなと思います。今回は支援というと大げさですけれども、少しでも子どもらの気晴らしに役立てたらいいなと思って参加しました」と言います。

組合員理事の奥迫敦子（おくさこ　あつこ）さんは昨年、支援バスで岩手県沿岸部にいき被災地を実際に見て話を直接聞き、とても貴重な体験をしたと言います。「今年度もボランティアバスを運行していますが、被災地の状況もニーズもその都度変わります。そんな中でどのような支援が一番求められるのかみんなで考えた結果、これまでの交流を次世代にまでつなげたいという思いから、今回の子供たちの夏休み企画ができたと」言います。さらに「夏休みには全国から、たとえばディズニーランドなどいろんなところから招待の

企画があるようで、その中で石川県を選んでくれて嬉しい。ほとんどの子どもは石川県は初めてのことと思うので、良い交流といろんな経験をしてくれたらいいと思います。違う環境で、ほっとするリフレッシュできるひと時を過ごしてくれれば嬉しいです。いろいろと大変な思いをしているんでしょうけれどもその点には触れずに、気がかりなく遊んでもらいたい」と言っていました。